

第13回 かながわ感動介護大賞

最優秀賞

新しい家族

須賀 眞理様

「眞理ちゃんがこれを食べて、と言っていましたよ。」「じゃあ、食べる!」
そう。私の名前は、認知症を患った母には特効薬の時代がありました。

そして、コロナ禍。会えない日が長く続き、母の認知症も進んでしまったようです。いつからか会っても、もう私が誰かもわからなくなりました。会話のキャッチボールも難しくなり、見かねて職員のKさんが会話に度々入ってくださることもありました。Kさんが頬をくつつけんばかりに近寄って、手を触れて目を見ながら話すと、母は氷が解けるように柔らかい表情になるのです。母にとって孫に近い年のKさんこそ、娘より自分に近い安心できる新しい家族なのだと感じました。幼子になった母は安心して甘えているのです。ちょっと嫉妬してしまうくらいです。でも、それが離れて暮らす私にも、どんなに安心をもたらすことか…。お会いできれば母の近況を伺え、相談できるKさんは母にも私にも今では新しい家族なのです。

今、母は彼女のことを「大好きさん」と呼んでいるそうです。そして、認知症があっても彼女と顔を合わせると表情が明るくなり、「会いたい人に会えてうれしい!」「今度バスに乗って新宿に映画を観に行こうよ。」など、しっかりとその時の気持ちを伝えられているそうです。

私もいつか施設にお世話になる日が来たら、100歳を迎えた母が、母らしく居ることができる、彼女のいる施設に…と、娘たちに兼ねがね希望している昨今です。

